2017年度入学試験問題

国　　語

（試験時間　14：50～15：50　60分）

1．解答用紙には，記述解答用紙とマーク解答用紙の2種類がありますので注意してください。

2．解答は，必ず解答欄に記入およびマークしてください。解答欄以外への記入およびマークは無効となりますので注意してください。

3．解答は，HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し，訂正する場合は，プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に，マーク解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。

4．解答用紙を折り曲げたり，汚したりしないでください。また，マーク解答用紙を記述解答用紙の下敷きに使用しないでください。

5．解答用紙には，必ず受験番号と氏名を記入およびマークしてください。

6．マーク解答用紙への受験番号の記入およびマークは，コンピュータ処理上非常に重要なので，誤記のないよう特に注意してください。

一　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（50点）

ここで、近代日本の哲学者・九鬼周造（一八八八―一九四一）の、出会いと別れの形而上学とも称すべき思想をとりあげておきたいと思います。九鬼は、この世におけるわれわれの存在は基本的に偶然なる存在であるが、そうしたことを踏まえて、この、出会いと別れの織りなす人生をどう考えたらいいのか、といった独自な思索を展開した思想家です。九鬼の代表的な著作は『偶然性の問題』です。九鬼は、「偶然性の問題」こそが哲学の基本命題であるとして、こう書き始めています。

偶然性とは必然性の否定である。必然とは必ず然か有ることを意味している。すなわち、存在が何等かの意味で自己のうちに根拠を有っていることである。偶然とは、偶々然か有るの意で、存在が自己のうちに十分の根拠を有っていないことである。すなわち、否定を含んだ存在、無いことの出来る存在である。

偶然というのは、「必ず然か有る」という必然に対する否定だ、と。必然とは、必ずそうなるという、意味・根拠をもってそうなることだとすれば、偶然とは、そうした意味や根拠を欠いた、偶々そうであるというあり方であり、われわれの存在もまたそうしたものとしてあるという認識です。そうした欠落・否定をふくんだ存在ということは、「無いことの出来る存在」、つまり存在していなかったことも十分ありえた存在として、われわれは今こうして存在しているということでもあります。その意味で、偶然性において存在は「無」というものに直面しているのであり、そうした存在をこえた「無」というものを問わざるをえないがゆえに、その思索は形而上学にならざるをえないとも述べています。

『偶然性の問題』で九鬼は、偶然の諸相について、洋の東西を問わず広く古典をショウリョウ(1)しながら、西洋哲学の伝統に抗しうる、より原理的・体系的な分析・考察を展開していますが、それは結論部でこうまとめられています。

偶然性のカクシン的意味[2]は「甲は甲である」という同一律の必然性を否定する甲と乙との邂逅である。我々は偶然性を定義して「独立なる二元の邂逅」ということが出来るであろう。

偶然性とは、甲が甲のままであるという同一の必然性が否定されて、甲とは異なる乙なり、丙なり、丁なりといった他者に出会うということにその「カクシン的意味」があるということです。「偶然の「偶」は双、対、並、合の意である。「遇」と同義で遇うことを意味している」のであって、あるものがそれとは異なるものと「遇」って、前とは違ったものへと変じていく、その分化・分裂の生成変化のあり方を偶然性のはたらきと規定するわけです。むろんそれは、あらゆる存在・事象において起こる事柄として、一般的・原理的に適用されるのです。そのことは、『偶然性の問題』とならんで九鬼の代表作とされる『「いき」の構造』[3]において、鮮やかに具体的に展開されています。

九鬼は、「いき」を構成するケイキ[4]として、「媚態」、「意気地」、「諦め」という、三つのケイキを挙げ、それぞれから分析しています。まず一つめの「媚態」[5]です。「媚態」とは媚びる態と書くように、男が女に、女が男に、あるいは人が人に、ともあれ何かしら近づき自己同一化しようとする「色っぽさ」であり、それがまず基本です。そういう接近のダイナミズムぬきに「いき」というエロスもありえないのですが、しかしそれは、かといって、いわばベタベタと一体化してしまうことだけが求められているわけではありません。「いき」においては、むしろ相手とはどこまでも簡単には一つにはなってしまわないという緊張を持った「二元的態度」が求められています。いうまでもなく、それは先に見た「独立なる二元の邂逅」ということを踏まえたもので、そこには、そもそも相手がこの人でなかったかもしれないという可能性もふくめ、様々な偶然性を前提にしての態度だということです。しかしそれゆえにこそ、そこには、自分と相手との自由な選択や切ない緊張感といったものが保たれるのであり、「異性が完全なる合同を遂げて緊張性を失う場合には媚態はおのずから消滅」してしまうというわけです。

「いき」の二つめのケイキは「意気地」です。それは「媚態の二元的可能性に一層の緊張と一層の持久力を提供し、可能性を可能性として終始せしめようとする」ものです。

しかし、この「媚態」と「意気地」だけでは、ややもすればそのエロスのあり方は、「いき」の逆の「野暮」にも転落する可能性があります。そこには、三つめのもっとも大事なケイキとしての「諦め」[6]がなくてはならないと九鬼は説いています。

（「諦め」とは）運命に対する知見に基づいて執着を離脱した無関心である。……世智辛い、つれない浮世の洗練を経てすっきりと垢抜した心、現実に対する独断的な執着を離れた瀟洒として未練のない恬淡無碍の心である。

運命については、あとでも少し触れますが、この世のどうにもならない運命や現実に対して、いたずらに自分の側からする「媚態」や「意気地」だけをふりまわすのではなく、そのどうにもならなさに対して、何らかの「執着を離脱した無関心」をもたなければならないということです。

九鬼は「いき」とは、もともと江戸時代の遊里での芸者と客との男女関係から生まれたものだと考えています（が、むろんそれだけではなく、より一般的な男女関係や人間関係にも広げて考えています）。とりわけ、そうしたところで生きるには、あったであろう様々な、どうにもならない力やはたらきに対して、それをそれとして受け止めることによって、むしろ「媚態」や「意気地」がより高度に洗練されてくるというわけです。

以上のような九鬼の思索は、すべて、人が生きる、死ぬということ、また人が人と出会う、別れるということには、われわれにはどうにもならない偶然性がつきまとうということをめぐってのものということができます。

『偶然性の問題』にもどると、九鬼はその思索を、「形而上学」の営みとして展開しています。ある個物や個々の事象が存在するのは、偶然の所産ですが、九鬼は、しかし、それは考え方によっては、そこにどこまでも必然というものを想定することもできるとしています。われわれが存在するのは、まずは父と母の邂逅、出会いによるわけですが、その出会いは、たとえば、二人が共通に同じ職場に勤めていたとすれば、その出会いは厳密な意味での偶然ではないということです。その出会いはある意味必然でもあるわけです。

しかし、同じ職場にいたということで出会いが必然化されたとしても、さらにその原因にサカノボ[7]れば、つまり、なぜその職場に二人が勤めるようになったのかと問えば、ふたたび偶然ということになってしまう。が、それもさらにサカノボって、その原因を考えれば、そこには二人がその職場の近くに住んでいたとか、同じような職能があったからだとか、何らかの共通の原因としての必然性を考えることができる――。

このように、どんな個物でも個々の事象でも、出会う二つの因果系列のさきへさきへとサカノボっていけば、それぞれに共通の原因を見出すことができるのであり、その意味では、われわれは「経験の領域にあって全面的に必然性の支配を仮定」することができるというわけです。

しかし九鬼は、そうやって必然の因果系列を無限にサカノボっていったとしても、最後にはそれ以上サカノボることができない究極の原因Xにぶつかるといい、そのXを、それ以上、なぜの必然を問うことができないといった意味で「原始偶然」とよんでいます。それはすでに、「経験の領域」をこえた形而上学的領域の問題です。つまり「原始偶然」とは、今自分がここにこうして甲としてあることの究極の偶然性であり、それは乙でも丙でも丁でも、その他でもありえたという、いうなれば、賽ころをふってどの目が出たかということにも等しいことだというわけです。

このように、われわれの存在は、甲でなく、乙でも丙でも丁でもありえたし、またそもそも存在しなかったことも十分にありえた偶然性に貫かれているわけですが、しかし同時に九鬼は、それはそうでありながら、今ここにこうして甲としてたしかに存在し来たっているということの受け止め方として、そこに単なる偶然性をこえた必然性への眼差しをふくめたものを要請してきます。『偶然性の問題』は、最後にきて「運命」ということを問題にしています。

偶然としか思えないものにある必然性を感じてしまうときに、われわれはそこに運命ということを考えるということです。そこで大事なのは、運命とはそうしたものであるがゆえに、それにただ巻き込まれホンロウ[8]されるべきものではなく、それをそれとしてあらためて認め、受け取りなおすところに、真に運命となりうる[9]というわけです。九鬼はそのことを、「運命とは先駆的決意性の中に内在して初めて運命となる」とも言っています。そこには「独立なる二元の邂逅」としての偶然性を十分に踏まえ

ながら、なおそれをふくんで、それによって人が生きうる必然性というものを、あらためてとらえなおそうとする思想の営みを見出すことができるだろうと思います。

（竹内整一『日本人はなぜ「さようなら」とわかれるのか』より）

注　瀟洒……すっきりとして、洗練されたさま。　恬淡無碍……無欲であっさりしているさま。

〔問一〕　傍線(1)(2)(4)(7)(8)のカタカナを漢字に改めなさい。（楷書で正確に書くこと）

〔問二〕 傍線(3)「『「いき」の構造』」とあるが、九鬼周造の言う「いき」に合致した振る舞いの例として、もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A　A君とA子さんはかつてお互いに想(おも)いを寄せ合っていたが、A君は告白を何度も躊躇(ちゅうちょ)しながらも、思い切ってその想いを打ち明けた。その結果、恋は実り、A君はA子さんと、平凡ながらも安らぎのある、幸せな家庭を築き、一生を添い遂げるまでに至った。

B　B君とB子さんはかつてお互いに想いを寄せ合っていたが、B君はB子さんに長い間その想いを告白することがなかった。結局、B子さんは別の男性と付き合うことになり、B君はB子さんのことを遠くから、静かに、そして優しく見守り続けるようになった。

C　C君とC子さんはかつてお互いに想いを寄せ合っていたが、C君はC子さんにその積年の想いを思い切って打ち明けてみた。しかし、ボーイフレンドが既にできたことをC子さん自身から告げられ、C君は煩悶(はんもん)の末、C子さんのことを諦めて、自ら身を引いた。

D　D君とD子さんはかつてお互いに想いを寄せ合っていたが、D君はD子さんにその想いを打ち明けなかった。そんな折、人づてにD子さんにボーイフレンドができたことを知り、D君はD子さんに対する想いを抱きつつもこれを整理し、友人として接し続けた。

E　E君とE子さんはかつてお互いに想いを寄せ合っていたが、E君はE子さんにその想いを告白することなく、年月が過ぎていった。そんなある日、街中で子供や夫と共に歩いている場面に遭遇した際に嫉妬心を覚え、その場ではなく、人知れず家で泣いた。

〔問三〕 傍線(5)「「媚態」」とあるが、媚態についての説明として、もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A ある個人が別の個人に近づきたいと願う時に、相手がこの人ではなかったかもしれないという偶然性が媚態には含まれるので、その相手の独立性は尊重されることになる。

B ある個人が別の個人に近づきたいと願う際の色気の原動力が媚態だが、媚態はその相手とすぐに、一体化することを目指しておらず、むしろ、これを拒否する力になる。

C ある個人が別の個人に近づきたいと願う時、相手がこの人ではなかったかもしれないという偶然性を自覚しながら、容易に一体化する事を思い止まる態度が媚態である。

D ある個人が近づきたいと願っていた別の個人と完全なる合同を遂げて、相手との間に当初は存在していた緊張性が失われてしまうと、媚態は自ずとエロスに転換する。

E ある個人が別の個人に近づき、一体化したいと願う際の接近のダイナミズムが媚態だが、これが持つ二元的な態度によって、一層の緊張性がもたらされて、温存される。

〔問四〕 傍線(6)「諦め」を筆者が言い換えたもっとも適当な箇所を三十字以上三十五字以内で抜き出し、最初と最後の五字を書きなさい。(句読点、かっこ等の記述記号も字数に数える)

〔問五〕 傍線(9)「真に運命となりうる」とあるが、九鬼周造の「運命」のとらえ方の説明として、もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A　ある出来事に直面した時、運命だから偶然と必然のバランスは同じだと達観し、積極的に気分転換をしようと決意することで、「運命」を肯定できる。

B　ある出来事に直面した時、運命なのだから仕方ないと甘受しつつも、自ら先んじて違う道を切り開こうと決意することで、「運命」の真価を実感できる。

C　ある出来事に直面した時、運命だと感じつつも、積極的に違う可能性を探してゆこうと決意することで、「運命」を試練として受け止めることができる。

D　ある出来事に直面した時、運命なのだから仕方ないと諦めつつ、過去の出来事をひとつひとつ見直そうと決意することで、「運命」と慎重に向き合える。

E　ある出来事に直面した時、運命だからやむをえないと割り切りながらも、その事態を受け入れてゆこうと決意することで、「運命」の意義を理解できる。

〔問六〕 九鬼周造が『偶然性の問題』の中で形而上学の思索を展開したのはなぜか。筆者が考える理由として、もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A　形而上学の主たる関心は目に見えるものごとの背後にある良し悪しを考えることにあるので、日々の生活や人生の中でいろいろな影響を及ぼす偶然性について、その功罪を考察する必要があったから。

B　形而上学の主たる関心は目に見えるものごとの成立の裏に隠れた原理に思いを巡らすことにあるので、人生や日々の生活で未完の事態をも含む偶然性について、その本質を考察する必要があったから。

C　形而上学の主たる関心は目に見えるものごとの生成のプロセスを解き明かすことにあるので、多種多様な可能性の集合体である偶然性について、これが生み出す出来事を考察する必要があったから。

D　形而上学の主たる関心は目に見えるものごとの変容の過程を解明することにあるので、人と人との出会いを生み出す偶然性について、これが出会いにもたらす様々な変化を考察する必要があったから。

E　形而上学の主たる関心は目に見えるものごとの機能がどのように規定されるかを考えることにあるので、人と人との邂逅を生み出す偶然性について、これがもたらす諸作用を考察する必要があったから。

〔問七〕 次の文ア～エのうち、本文の趣旨と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

ア　出会いは必然的なものであるように人は考えてしまうものだが、実は、偶然性こそが人と人とを巡り合わせ、あらゆる事象を変化させているのである。

イ　様々な偶然性を含む邂逅がもたらした私たちの存在は必然的なものではなく、従って、私たちの運命もまた必然性を排除して、とらえなければならない。

ウ　「いき」と運命ではいずれも諦めることが不可欠な要素である一方で、運命の方だけに「そうではない可能性」が備わっている点で、両者は対照的である。

エ　男性が女性に、または、女性が男性に近づき同一化を試みる時、ベタベタとし過ぎると野暮になってしまうことから、媚態と野暮は表裏一体の関係にある。

二　次は岸政彦の「祝祭とためらい」という章題の文章である。これを読んで、後の問に答えなさい。（20点）

人類学者の小川さやかが書いた本『都市を生きぬくための狡知（こうち）――タンザニアの零細商人マチンガの民族誌』（二〇一一）は、ほんとうに衝撃的だった。小川は、タンザニアの都市部で漂泊する、路上の物売りの世界に飛び込み、その仲間に入って、そしてついに自分でもひとりの行商人となってしまう。タンザニアの路上で古着を売る若い日本人の女性は、さぞ現地でも目立っていたことだろう。

小川自身のフィールドワークにおける「入り込み方」も興味深いが、そこで描かれている「マチンガ」（路上の零細な行商人たち）の世界は、ほんとうに面白い。そこでは生身の、人間と人間のあいだでの取引がおこなわれていて、それを規制する「外部の権力」はほとんど存在しない。だから、ここでは、さまざまな機知や機転、あるいは「狡賢（ずるがしこ）さ」がものを言う。路上の人びとは、客とのあいだだけではなく、お互いでさえも、だましあい、ごまかし、言葉で煙（けむ）に巻き、自分の利益を最大化しようとする。

しかし、もっとも面白いのは、このマチンガたちの世界が、お互いのお互いに対する闘争や裏切りによって内部から崩壊せず、最低限の相互の信頼関係を維持し、なんとかうまく「回っている」ということだ。私たちは、警察や軍隊のような、外部の強制力がないと、モラルや秩序は崩壊してしまうと思い込んでいる。ところが、そうした強制力のないところで、マチンガたちはお互いだましあいながら生きているのだが、そこには最低限の信頼や信用が存在しているのだ。この本を読むと、つくづく、「社会」というものは、たくさんの「良くないもの」を含みながらも、それでも成り立って「しまう」ものなのだと思う。強制力のないところには殺し合いしかない、と思い込んでいる私たちにとって、(1)それはとても痛快な「解毒剤」になる。

私たちは、なにか怖いこと、嫌なことがあると、すぐに先生に密告したり、警察に通報したりする。でも、たとえば電車や路上で騒いでいるひとたちは、自分たちで盛り上がって周りのことを忘れてしまっているだけのことも多い。なるべく笑顔で、すみませんが静かにしてもらえませんか、とお願いすると、たいていの場合は、むこうも笑顔で、ああごめんなさい、うっかりし

てましたと言ってもらえる。

特にネットの世界を見ていると、ほんとうに私たちは、「他者」が怖いんだなと思う。そこにはいわれのない、根拠のない恐怖が充満していて、その反動で、陰湿で病的な憎悪がはびこっている。

いつも思い出すのは、小川さやかが描いた、他者との「祝祭的」とでもいうべき、幸福な出会いだ。もちろん、長年にわたるフィールドワークの過程において、ほんとうにいやなことや、身の危険を感じたこともたくさんあっただろうけど、小川が（実に楽しそうに）描くのは、まるでお祭りのような賑やかな路上の世界での、さまざまに行き交う人びととの出会いである。

私は、ある雑誌で、小川さやかの本と、ヤン・ヨンヒの映画『かぞくのくに』を対比させて論じたことがある。この二つの作品は、ほんとうにどちらも大切なことを言っているのだが、まったく正反対である。

ヤン・ヨンヒ監督の映画『かぞくのくに』（二〇一二）は、「帰国事業」で北朝鮮に帰った在日コリアンの男性と、日本に残った家族との、二十五年ぶりの出会いを描いた作品である。在日コリアンの状況や、戦後の日本社会のありかたを照らし出しながらも、この映画は、あくまでもひとつの家族の、小さな、ささやかな日常をじっくりと描写する。

一九九七年の夏。物語の主人公は、東京の下町に家族と暮らす、在日コリアンの若い女性、リエである。喫茶店を営む両親とともに実家で生活する彼女の兄ソンホは、一九七二年ごろ、十六歳で北朝鮮に「帰国」している。

脳の手術のために、実に二十五年ぶりに兄が日本へと帰ってくるところから話がはじまる。手持ちのブレがちなカメラで、ストーリーはゆっくりと進む。舞台となる実家と、その一階にある喫茶店は、古くて、すこし汚くて、生活感がある。この喫茶店や実家の生活感こそ、ヤン監督がまず何よりも表現したかったことだろう。それは「ここにひとが生きている」ということの、視覚的表現である。ここに映っているのは、民族や人種というカテゴリーではなく、それぞれ一人ひとりが生きている「ひと」である、ということを、私たちに直接訴えかける。

淡々と、静かに、ひさしぶりに再会した家族の日々が綴られ、そして映画はとつぜん、きわめて不条理で理不尽な終わり方をする。私たちはあっけにとられ、スクリーンのこちら側に取り残される。

この作品でヤン監督が描こうとしたのは、他者との出会いではなく、いわば「他者であること」そのものである。この映画には良心的な日本人との幸福な出会いは一切出てこない。それどころか、そもそも日本人さえほとんど出てこない。ただ、四人の家族を中心に、在日の日常と現実が描かれる。

私は、在日や部落や沖縄の人びとに対して、あるいは女性や障害者に対して、はっきりとマジョリティの立場に立っている。しかし、そうした存在についてよく知りたいと、ささやかではあるが勉強してきたし、仕事やプライベートで、そういう人びととのつながりもしだいに増えてきた。

だが、根本的なところで、やはり私はマジョリティでしかない。

私たちマジョリティは、「国家」をはじめとした、さまざまな防壁によって守られているために、壁について考える必要がない。壁が目に見えなくなるほど壁によって庇護(ひご)されている。たとえば、私たちは、国家によって家族や仲間から引き裂かれたことがないからこそ、それらを国家と切り離して考えることが許されている。さまざまな「特権」によって、私たちのもっとも個人的で内密な生活が可能になっているのである。もちろんそこには、個人的な悩みや苦しみが限りなく存在するが、マジョリティはそれらを、あくまでも個人的な問題として悩み、苦しむ「ことができる。」

そんな、壁によって守られ、(2)「個人」として生きることが可能になっている私たちの心は、壁の外の他者に対するいわれのない恐怖によって支配されている。確実に、私たちの心の奥底には、他者にたいする怯(おび)えがある。そして、この不安や恐怖や怯えは、きわめて容易(たやす)く、他者にたいする攻撃へと変わる。

だから、この社会にどうしても必要なのは、他者と出会うことの喜びを分かち合うことである。こう書くと、いかにもきれいごとで、どうしようもなく青臭いと思われるかもしれない。しかし私たちの社会は、すでにそうした［(3)］な態度が何も意味を持たないような、そうしているうちに手遅れになってしまうような、そんなところにまできている。異なる存在とともに生きることの、そのままの価値を［(4)］に肯定することが、どうしても必要な状況なのである。

しかし、また同時に、私たちは「他者であること」に対して、そこを土足で荒らすことなく、一歩手前でふみとどまり、立ち

すくむ感受性も、どうしても必要なのだ。ヤン・ヨンヒの、内省的で暗鬱な、重苦しい作品は、安易な出会いや対話に対して私たちが抱く都合のよい期待を一切寄せつけない。繰り返すが、この作品に「良心的な日本人」が出てこない、という点は、些末なことのようで非常に重要なことだと思う。すくなくともこの作品によってヤン・ヨンヒは、そこに私たちが容易に踏み込めないような、ある「痛切なもの」を描いている。

どちらが大切ということではない。私たちには、どちらも欠けているのである。

（岸政彦『断片的なものの社会学』による）

〔問一〕 傍線(1)「それはとても痛快な「解毒剤」になる」とあるが、その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A　正直さよりも機知や機転がものを言うマチンガの社会の存在は、裏切りやごまかし、だましあいといったものは「良くないもの」という私たちの誤った道徳観を鮮やかに覆してくれる。

B　互いへの最低限の信頼がマチンガの社会を機能させているという事実は、私たちを外部の強制力が無ければ社会秩序は崩壊するはずだという思い込みからすっきりと解放してくれる。

C　だましあいや裏切りがマチンガの社会を成立させているという事実は、他者に不信や恐怖ばかり抱きがちな私たちの偏見を見事に正してくれる。

D　警察や軍隊のような外部の強制力は、マチンガの社会には存在するだましあいや裏切りといった「良くないもの」を私たちの社会から面白い程に消し去ってくれる。

E　だましあいや闘争、裏切りによる社会秩序の崩壊を防いでくれるマチンガの機知や機転を利用することが、偏見に満ちた私たちの社会を見事に救ってくれる。

〔問二〕 傍線(2)「「個人」として生きること」とあるが、その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 一市民として国家から保護され、種々の特権を行使して恵まれた人生を送ること
B 国家や大多数の意見に同調できずに孤立しながらも、個性的な人生を送ること
C 大多数のひとりとして、普通の私生活を享受できる理由を意識せずに生きること
D 他者からの攻撃を恐れて外部との接触を避け、安全な場所で日常生活を送ること
E 家族の問題など個人的なことは政治や国家とは無関係だと認識しながら生きること

〔問三〕 空欄(3)(4)に入れるのにもっとも適当な語句の組み合わせを左の中から選び、符号で答えなさい。

A (3) 楽観的 (4) 逆説的
B (3) 傲慢 (4) 積極的
C (3) 皮肉 (4) 強引
D (3) 絶望的 (4) 愚直
E (3) 冷笑的 (4) 素朴

〔問四〕 この文章の章題は「祝祭とためらい」である。「ためらい」を別の言葉で言いかえている箇所を本文中から四十五字以上五十字以内で探し出し、最初の五字を答えなさい。(句読点、かっこ等の記述記号も字数に数える)

三　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（30点）

肥後守盛重は周防の国の百姓の子なり。六条の右大臣の御家人なにがしとかや、かの国の目代にて、下りたりけるに、ついでありて、かの小童にてあるを見るに、魂有りげなりければ、よび取りて、いとほしみけるを、京に上りてのち、供に具して、大臣の御もとに参りたりけるに、南面に梅の木の大きなるがあるを、「梅とらむ」とて、人の供の者ども、あまた礫にて打ちけるを、主の「あやつ、とらへよ」と、御簾の内よりいひ出だしたまひたりければ、蜘蛛の子を吹き散らすやうに、逃げにけり。

その中に童一人、木の本にやをらたち隠れて、さし歩みて行きけるを、「(1)優にも、さりげなく、もてなすかな」とおぼして、人を召して、「しかしかの物着たる小童、たが供の者ぞ」と尋ねたまひければ、(2)主の思はむことをはばかりて、とみに申さざりけれど、しひて問ひたまふに、力なくて、「それがしの童にこそ」と申しけり。すなはち、主を召して、「(3)その童、参らせよ」と仰せられければ、参らせけり。

いとほしみて、使ひたまふに、(4)ねびまさるままに、心ばせ、思ひはかりぞ深く、(5)わりなき者なりける。つねに前に召し仕ひ(6)たまふに、あるつとめて、手水持ちて参りたりける、仰せに、「かの車宿の棟に、烏二つ居たるが、一つの烏、頭の白きと見ゆるは、僻事か」と、なきことをつくりて、問ひたまひけるに、つくづくと(7)まぼりて、「しかさまに候ふ、と見(8)たまふ」と申しければ、「いかにもう(9)るせき者なり。世にあらむずる者なり」とて、白河院に進らせられけるとぞ。

（『十訓抄』による）

注　六条の右大臣……源顕房。　目代……国司の代わりに任国に行き、国務を代行する者。
魂有りげ……才覚、根性がありそう。　礫……小石。　それがし……誰それ。
手水……手や口を清めるための水。　車宿……牛車や輿を収納する建物。

〔問一〕 傍線(1)「優にも、さりげなく、もてなすかな」にはどのような気持ちが込められているか。もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 蜘蛛の子のようにひとりだけさっと逃げた様子に、優秀で察しが良いなと思った。
B 小石を投げず、逃げ隠れもしなかったところから、のびやかで堂々としていると思った。
C 「梅を取ろう」と他の子どもに呼びかける声から、何気ない中に優しさがあると気に入った。
D 木の根もとにそっと隠れてゆっくり歩く姿の、優雅で平然とした態度が素晴らしいと思った。
E 御簾の中から聞こえる声に紛れて歩いて逃げた様子から、細やかで機転がきく様子を感じた。

〔問二〕 傍線(2)「主の思はむことをはばかりて」という心情の説明として、もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 自分の供の者も一緒に捕まったのかと心配して
B 右大臣が激しくお怒りの様子と知り、緊張して
C 主人は供の者の責任を問われて困るだろうと気遣って
D 右大臣は何を思っていらっしゃるのかと不安に思って
E 身なりまでわかっているならば隠しきれないと覚悟して

〔問三〕 傍線(3)「その童、参らせよ」と言ったのは誰か。もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 肥後守盛重　B 周防の国の百姓　C 六条の右大臣　D 御家人なにがし　E 白河院

〔問四〕 傍線(4)(5)(7)の口語訳として、もっとも適当なものをそれぞれ選び、符号で答えなさい。

(4) 「ねびまさる」

A 大きくなる
B 盛んに働く
C ますます眠る
D 年を取りすぎる

(5) 「わりなき」

A 分別がない
B 強引な
C 優れた
D 美しい

(7) 「まぼりて」

A 保護して
B じっと見て
C 世話をして
D こっそり様子を見て

〔問五〕 次の文ア～オのうち、傍線(6)「たまふ」と同じ用法のものに対してはA、(8)「たまふ」と同じ用法のものに対してはBの符号で答えなさい。

ア かしこき仰せ言をたびたびうけたまはりながら、みづからはえなん思ひたまへ立つまじき。（源氏物語）

イ 誰が車ならむ。見知りたまへりや。（枕草子）

ウ 右馬頭の君は、人の妻をぬすみとりてなむ、あるところにかくれゐたまへる。（蜻蛉日記）

エ この御文見せたてまつりたまへ。（落窪物語）

オ まだ文章生にはべりし時、かしこき女の例をなむ見たまへし。（源氏物語）

〔問六〕 傍線(9)「うるせき者」という評言の内容として、もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 顕房の言うことが嘘（うそ）とわかっていても、よく考えた上で従うのを見て、機転のきく人だと感心した。

B 顕房の言うことに、本当に御覧になったのかと確認するのを見て、細かい人だから遠ざけようとした。

C 顕房の嘘に全く気づかないふりをしてすぐ返事をしたのを見て、悪知恵の働く人だと評価した。

D 顕房の出したなぞなぞに対して何とか答えを出そうとする様子を見て、利口な人だとほめたたえた。

E 盛重をからかうためについた顕房の嘘に平然と答えるのを見て、信頼できない人だと幻滅した。